

DHARMA EYE



法眼

曹洞宗における菩薩戒について

奥村正博

曹洞宗国際センター所長

戒を受けることによってわれわれは仏教徒になる

仏教は民族宗教ではありませんから、生まれると同時に自動的に仏教徒になる人はいません。仏教徒になるためにはまず、仏・法・僧の三宝に帰依するという決意をしなければなりません。そのようにしてわれわれは釈尊の戒を「生きるための指針」として授かるのです。もともとインドでは、比丘は250の律(Vinaya)、比丘尼は348の律を受けました。在家の仏教徒は5、8、あるいは10の戒を受けました。中国の大乘仏教においては比丘も比丘尼も律とともに菩薩戒も受けましたが、それはおそらく中国で独自に始まったことでしょう。

日本の天台宗における戒

9世紀の初頭、日本天台宗の開祖である最澄(767-822)が大乘戒を授けるだけで十分であるという断を下しました。日本は大乘仏教の国であり律は大乘のものではないというのがその理由でした。天台宗においては大乘戒は円頓戒(円かにして頓に成ずる戒)とよばれ、三つの浄戒と十の重戒そして四十八の軽戒から成り立っています。それは『梵網経』とよばれる經典に由来するものです。現代の学者の説によれば、この經典は五世紀ごろに、インドではなく中国で作成されたとされています。

道元禅師は菩薩戒のみを受けた

日本曹洞宗の開祖である道元禅師(1200-1253)はもともと日本天台宗の僧侶として1213年に得度をうけました。ですから彼が受けたのは大乘戒だけなのです。伝記によれば、道元禅師は中国の僧院で修行する許可を得るのに苦労したと伝えられていますが、それは禅師が、中国において正式の僧として認められる必要条件である律を授かっていなかったからです。実際、彼は律を授かってはいません。自分の弟子や在家の信者に対しても、「仏祖正伝菩薩戒」とよばれる十六条の戒のみを授けています。曹洞禅の伝統においてわれわれが授かる菩薩戒は律とはかなり性格を異にしています。



『梵網経』における菩薩戒

『梵網経』のなかで十重禁戒と四十八軽戒について序説的に述べてある箇所には次のような趣旨の記述があります。光明金剛宝戒は一切の仏の本源、一切の仏の本源であり仏性の種子である。一切の意識色心、この情、この心あるものは皆、仏性戒のなかに入る。当常有の因があるから当常有の法身がある。そのようであるからこのような十の波羅提木叉が世界に出てくるのである。それらはダルマ(法)の戒である。それらの戒は三世一切の衆生によって頂戴受持されるものである。わたしはこれから「十無尽蔵戒品」を重ねて大衆のために説こう。それは一切衆生の戒である。その本源は自性の清浄さである。

また十重戒についての序文において、『梵網経』には「その時、釈迦牟尼仏、初めて菩提樹下に坐して無上覚を成じ、初めに菩薩の波羅提木叉を結したまう」とあります。

波羅提木叉とは戒についてのテキストのことですから、ここでは『梵網經』のことを意味しています。つまり、菩薩戒は釈尊が無上覚を成じるやいなやすぐに制定されたものであり、それは彼が説法を開始する以前のことであったという意味なのです。歴史的に言えば、これは正しくありません。釈尊のまわりに僧伽が形成されたあと、釈尊は弟子達が過ちを犯すたびに勧告を発し、「もう二度とそれをしてはいけない」と教えました。釈尊のこうした勧告は十大弟子の一人であるウパリによって記憶されました。釈尊の死後まもなくマハーカシャパによって指導された第一回の仏典結集において、ウパリは彼の記憶していた釈尊の勧告を読誦しました。それが律の元になりました。釈尊は人々が過ちを犯すに先立って、戒あるいは規則を制定したりはしませんでした。律のテキストには、それぞれの戒がなぜ制定されたかを説明する物語が記録されています。それらの物語を読めば、僧伽というものが生身の人間の集まりだったということがよくわかります。釈尊の指導のもとにダルマを学び修しようという願いをもって集まってきたにもかかわらず、彼らはあらゆる種類の過ちをおかしました。

菩薩戒の基本的な考え方は律とはたいへん違っています。『梵網經』は、菩薩戒は釈尊が無上覚を成じたときに制定されたという点をあげて両者の違いについて指摘しています。

道元禅師は『教授戒文』の冒頭において同じことを次のように指摘しています。「諸仏の大戒は諸仏の護持したもう所なり。仏仏の相授あり、祖祖の相授あり、受戒は三際を超越し…云々」菩薩戒は過ちを犯した僧への釈尊の勧告や同じ過ちを犯すことへの禁止令を集めたものではありません。菩薩戒は仏祖から仏祖へと伝えられていく正法と同じものなのです。だからこそそれは『梵網經』のなかで「ダルマの戒」と呼ばれているのです。十重戒は釈尊がさとしたダルマの十の倫理的側面なのです。それはのちに釈尊の弟子達に説かれ、さらに祖師から祖師へと代々伝えられてきたのです。

菩薩戒の基盤となっているのは釈尊がさとしたあらゆる存在のリアリティです。いいかえればあらゆる存在の無常性、無我性、縁起性です。われわれもあらゆる存在も無常であり、無我であるというリアリティに目覚めるとき、なにものにも執着することはできないことが理解できます。そして自分自身、自分の所有物、他のあらゆるものへの執着から解放されます。インドラの網（因陀羅網）の結び目のようにすべてのものが他のすべてのものにつながりあっているという事実に目覚めるなら、自分があらゆるものによって支えられあらゆるものと共に生きていることを理解できます。われわれは他との関係においてのみ存在することを許されているのです。そういうリアリティが菩薩



禅宗寺の授戒会の戒弟

戒の元になっているのです。すべての存在が相互につながっていることを理解するとき、おのずと他に対して役に立とうとし、他に対して害を与えないように努めるようになるのです。

懺悔

曹洞宗の伝統では戒を授かる儀式において、まず次のような偈を唱えて懺悔をします。「我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋痴 従身口意之所生 一切我今皆懺悔」

『普賢觀經』からとられたこれとは別な懺悔のための偈があります。「一切業障海 皆従妄想生 若欲懺悔者、端坐念実相」

この偈は菩薩戒がリアリティへの目覚めとこのリアリティについての智慧に基づくものだけということをはっきりと示しています。

三帰

そのあと仏・法・僧の三宝に帰依します。仏とはリアリティに目覚めた者のことです。法とはリアリティそのもの、もののあるがままのありようです。僧とはすべての存在のリアリティについての教えを学びそれに従って生きようと願う人々のことです。

三聚浄戒

次に、三聚浄戒を受けます。(1) 道徳的規則を受け入れるという戒（摂律儀戒）、(2) 正しい行いを受け入れるという戒（摂善法戒）、(3) すべての存在を受け入れるという戒（摂衆生戒）。これら三つの戒は菩薩の道を歩んでいくうえでの方向性を与えるものです。

十重戒

十重戒とは(1) 殺さない、(2) 盗まない、(3) 邪な性的な行為をしない、(4) 嘘をつかない、(5) 人を酔わせるものを扱わない、(6) 他を批判しない、(7) 自分を褒め他をけなさ

ない、(8) 法や財産について出し惜しみしない、(9) 怒りにかられない、(10) 三宝をけなさない、です。

最初の戒について、道元禅師は『教授戒文』において「生命不殺仏種増長、仏の慧命を継ぐべし。生命を殺すこと莫かれ」と注釈を加えています。

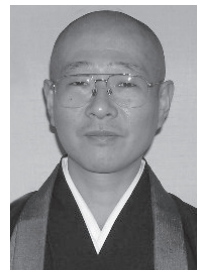
ブツダを実現する種子を育てていくためには、殺さないような努力を続けなければなりません。同じように、他の九つの戒もすべてあらゆるの存在のリアリティが備えている徳なのです。

禅と戒は一つである

曹洞宗の伝統においてわれわれが受ける菩薩戒は「禅戒」ともよばれています。それはわれわれのする坐禅と戒とがひとつのものであるということです。坐禅の修行においては、われわれのところが作り出したものである「世界の囹」の上ではなく、すべての存在のリアリティという地盤の上に自分の全分を託します。日常生活のなかで戒を守る努力を続けることは、坐禅によって導かれた生活をする努力とひとつのことなのです。



戒師 - 板橋興宗、前曹洞宗管長



アメリカの授戒会

長曾龍生

アメリカに道元禅師の教えが伝えられてから今年で80周年を迎えるという。それを記念して両大本山別院「禅宗寺」で授戒会が修行され、私も日本からの随喜衆の一員として太平洋を渡った。

アメリカで初めて修行された授戒会は、日本語と英語とを交え、日米の僧侶が力を合わせての法要で、少々たどたどしくはあったがとても感動的であった。中でも教授道場は圧巻だった。教授師様が穏やかに柔らかい声で戒文を唱えられる。続いて通訳の懐浄師が厳かにしかし力強く英訳文を読み上げる。静かな法堂に二人の声が交互に響きあう。まさにアメリカの授戒会ならではのシーンであった。

新しい世界を開拓しようとする国際布教師の生き生きとした表情、伝道教師のひたむきな姿、授戒会で出会ったアメリカ在住の宗侶方はいずれも輝いていた。殊に毎晩、翌日の行持の練習に熱心に取り組んでおられる伝道教師の方々には頭の下がる思いがした。

授戒会は素晴らしい体験であったし、その後訪れたグランドキャニオンの壮大さにも感動した。けれども初めてのアメリカで最も印象深かったのは、ラスベガスという街であった。巨大なホテルが立ち並び、ギャンブル場は24時間営業。人工美の極致ともいえる極彩色でまばゆいばかりのネオンが街中にきらめき、夜中でも消えることはない。文字通りの不夜城であり、欲望のつぼである。

その喧騒の中で、ファーストフードで太りすぎの人々がコーラ片手にスロットマシンに向かう姿は、人間の欲望の果てにあるものを見たようで、なにか背筋が凍るような思いがした。この国にこそ欲望をコントロールして真の幸福を得るというお釈迦様の教えが必要なのだとつくづく感じた。

そういう意味で今回の授戒会は、80周年とはいうものの、けして集大成ではなく、仏法東漸のひとつの足がかり、始めの一步なのかもしれないと私は思った。



禅宗寺での授戒会— 和合性と多様性

ニトラウアー・洞宗

2003年10月15日から19日にわたって、ロサンゼルス
の禅宗寺において北アメリカ開教80周年・禅宗寺創立80
周年記念の法要がとりおこなわれました。この法要について論
じる前に、禅修行としての授戒会について自分が考えているこ
とをいくつか記してみたいと思います。

禅センターで禅を修学している人たちのなかには、戒を受け
るのに三つの異なった儀式があることを知らない人が多いでし
ょう。この三つの儀式とは出家得度、在家得度、そして授戒会
です。在家得度と授戒が混同されている場合が多いのですが、
両者ははっきり区別されるべきものです。出家得度と在家得度
は「得度」と呼ばれているように、それによって得度を受ける
者と僧伽(サンガ)全体との関係が変わることを意味しています。
それに対して、授戒会は出家者、在家者のどちらによっても修
されるものであり、それによって僧伽内部での地位にはなんら
変更が起こりません。もうひとつの違いは出家得度、在家得度
の儀式はそう時間がかかるものではない(せいぜい数時間)の
に対し、授戒会は伝統的には一週間という長い時間をかけて行
なわれます(時には短縮されることもある)。

わたしはこれまでにいくつかの出家得度の儀式とたくさんの
在家得度の儀式を見てきましたが、授戒会については今回の禅
宗寺での授戒会以外にはただ一度しか(それは日本においてで
した)見たことがありませんでした。授戒会を厳修するため
には多くの日数がかかり、多大の下準備や多くの人々の協力が要
求されるため、比較的稀にしか行われなからずです。ですから
今回、禅宗寺での授戒会に随喜させていただく機会を得たこと
をたいへん嬉しく思っています。

わたしがこれら三つの儀式の違いにこだわるのは、アメリカ
人修行者たちの、「自分たちも是非、授戒会をもちたい」とい
う声を聞いているからです。さまざまな修行者たちが、出家得
度や在家得度の儀式ではなく、より深く戒を修し戒を実生活
の中で生きるための手段としての授戒会をぜひとも経験したい
という真摯な願いを表明しています。彼らは、在家得度や出家得
度によって僧伽に対する義務をさらに増やすことなく、釈尊の
定めた戒に自分をあらたにつなげたい、あるいはそれとのつな

がりをあらためて公言したいという強い望みをもって
います。授戒会はまさに彼らのそういう望みに応えるもの
なのです。

わたしがともに修行している人たちの多くは、自分がし
ている修行に対して過剰なプライド(うぬぼれ・思い上がり)を持
つという問題があることに気づいています。長年坐禅を修して
きた人たちでさえ、そのこと(自分が長年にわたって坐禅を修
行してきたこと)を自慢しがちなのです。よく「われわれは坐
禅をする者であって、仏教の崇拝者ではない」という声を聞
きますが、それは自分が坐禅をしていることに対してもって
いるうぬぼれの表明であり、他の修行者をけなすことに他
ならないのです。授戒会においては礼拝や三宝に対する帰
依を口にだして唱えろといったさまざまな信仰表白的な
修行をたくさん行います。ですから、それは仏道修行にお
いては思い上がりやうぬぼれを感じる余地などどこにも
ないことを思い出す素晴らしい手段となるのです。うぬぼ
れは余計なものです。そしてそれはしばしば、あまり利益
をもたらさない余計なものであることが多いのです。な
なかをもっと上手く行う可能性を摘み取るうえで、ある
程度上手くできることを自慢することほど、効果的な
ことはないのです。

授戒会において中心を占めているのは懺悔と誓願です。自
分のあやまちを懺悔・告白し、仏・法・僧に対して深く
帰依することを誓います。さらに悪い行いを止め、善い
行いをし、他者のために善いことを行い、十の禁戒を
守ることを誓います。それはある人たちが考えている
ように、坐禅修行と対立するものではありません。それ
はむしろ坐禅にもとづいた生き方の精髓を表現してい
るものなのです。内山興正老師が語っているように、
坐禅のうちには懺悔と誓願が必須のものとして含ま
れているのです。坐禅においてわれわれは坐相を守り
ながら醒め醒めたいこうと努力しますが、かならず
眠気や考え事のなかに落ち込んでいくときがありま
す。それに気づいたときにはそのたびに懺悔し、か
らだ・息・ところに十全な気づきを向けながら坐
るといふ誓願を新たにします。ですから、坐禅それ
自体が誓願・懺悔・誓願の更新の絶え間のない循環
なのです。

個人的な努力とそれに基づく所得を甚だしいほどに重視する
現代文化においては、坐禅を修行していることに思い上がりや
うぬぼれを感じるという過ちを犯すのはむしろ自然のなりゆき
かもしれません。しかし、もしわれわれが本当に坐禅の修行を
しているのなら、そうした思い上がりやうぬぼれは坐禅からわ
れわれの気をそらせるものの一つでしかないことに当然気が
つくはずで
す。そして、内山老師のアドバイスに従って、それを
懺悔し、心新たに誠心誠意をもって坐禅に取り組みな
おすべき
です。しかし、実際はなかなかそうはしません。個人主義への

一方的な心酔のせいで、うぬぼれが修行からわれわれの気をそらせるものであることがわからなくなっているのです。こうしてわれわれはちいさな個人的有所得を追及する“わだち”にはまり込みそれをたどるようになっていくのです。思い上がりやうぬぼれ（特に坐禅に対するうぬぼれ）によって道元禅師が弁道話で論じ鈴木老師が指摘している初心が忘れ去られてしまうのです。信仰表白的な修行（授戒とはそういうものだとはわたしは考えています）はこうした“思い上がりのわだち”からわれわれを引き出してくれる手段なのです。そこでは釈尊と彼の教えに目の当たりに出会い、自らをささげるという気持ちで礼拝を行うよう要求され、自分の過ちを見出してそれを懺悔し、これからはそれに気をつけるとあらためて誓いなおす機会が与えられるからです。思い上がりに対抗する上で、誠心誠意をもって自らの額を床につけるといふ行い以上に効果的なことはないのです。



禅宗寺の授戒会での歎仏

以上のような意味合いにおいて授戒会が大変影響力があり効果的な儀式であるということは、今回の禅宗寺での授戒会ではっきりと証明されたと思います。さまざまな背景と経験、修行歴、習慣をもった多くの僧侶達が一同に集まりました。授戒会が定期的に行われているような所からやって来た少数の僧侶もいれば、授戒会をまったく行わないか非常に稀にしかおこなわない所から来た多くの僧侶もいました。授戒会が進展するにつれ、参集した僧侶達のあいだのこうした多様な背景が禅宗寺での授戒会というひとつの修行を遂行するための素晴らしい基盤となっていきました。

当然のことながら最初は彼らの間には多少の葛藤や必要な順応の困難さがありました。しかし、授戒会について経験の豊富な人たちの親切で辛抱強い援助によってわれわれは徐々に和合して行動できるようになっていきました。多様性とお互いの相

違を保ちながらも一致団結して行動できる能力が発揮されたのです。それをまのあたりに見ることができたのは幸いでした。他の場所で授戒会を経験したことのある人たちは禅宗寺で行われた授戒会のやり方に従いました。それぞれ別の授戒会を経験した人たちのノートを比べてみて、授戒会というものがその場の状況にあわせて臨機応変に行われるものだというのを知るのは興味深いことでした。また、授戒や戒についての数々の講話はいずれも、われわれが感じていた調和と結束をさらに促進するうえで、非常に助けとなり良い効果をもたらしてくれました。

この場を借りて、この授戒会の主宰者の方々、参集した多くの僧侶の方々、戒師の方々、親切で思慮深い禅宗寺の僧侶方、この授戒会と記念法要を成功させわたしにとっても意味深い経験とさせてくれた北アメリカ総監部、国際センターに心からの感謝を捧げたいと思います。表舞台に出ることなく舞台裏で倦むことなく進んで、宿舎の世話・食事の用意・その他の業務をこなしてくれたスタッフの方々にも厚くお礼を申し上げたいと思います。彼らの存在には本当に励まされました。最後になりましたが、釈尊の教えを学び行じるために授戒会に参加した全ての人々に感謝いたします。

合掌





両大本山北米別院禅宗寺
創立80周年記念授戒会

漆谷真理子

私は授戒の意味もよくわからないまま、老師様がたのお話を聞きたいばかりに授戒を申しこみました。授けてみて、とても大切に大きな何かを、私達にさずけてくれるものと知りました。私が尊敬申しあげている、板橋禅師様のお話がきけて喜びでいっぱいですが、老師様がたのお話もさることながら、法堂直壇の長曾様の、落ちついた優しさのある司会、お坊様方の無駄のない動き、そんな素晴らしい方々に囲まれて、授戒できたことは感謝でいっぱいです。

一般に使われている懺悔の言葉は、時々耳にしていましたが、違和感があってあまり好きな言葉ではありませんでした。ですが今回懺悔の意味が、一つの例として、他の命を殺して私達は生きていかなければならないことも懺悔と知り、心から懺悔できるようになりました。そして懺悔する事によって色々な事にも感謝するということがわかってきました。感謝していますと、自然とおおらかになってくる自分に気づきました。

子供の頃から、仏様を拜んで、背を向けたことはありませんでしたが、戒法を授けてから仏様を背に 登壇させていただくのを、目のあたりにした時、びっくりしました。すごいことをさせていただけなのだ。登って良いものかと。こんなことをさせていただいたら、悪い事はできない。そんな事を考えていたら、まわりのお坊様方々のお導きで、登ってしまいました。この後、ポーとして生きてはいけないような気がしてきました。

本当に、秋葉老師様のお陰で、心の宝ものを頂きました。そして私達を導いてくださったすべてのお坊様方に、感謝の気持ちでいっぱいです。心からお礼申し上げます。

合掌



曹洞宗ハワイ開教
100周年記念慶讃行事

田宮隆児

2003年10月26日、シェラトン・ワイキキ・ホテルを会場とし、1300人を超える参加者を迎えて、曹洞宗ハワイ開教100周年記念慶讃行事が行われました。「新しい時代・新しいチャレンジ まごころと調和をもって」というテーマのもと、大道晃仙管長代理大本山總持寺副貫首斉藤信義老師を大導師に仰いで盛大な法要が厳修されました。それは、日本およびアメリカ本土から来られた約700人の参加者ととともに、人の和と懐かしい思い出を喜び合うすばらしい週末のひとつでした。はるばる日本からやってきた多くの人々はたくさんのアロハ（愛・親切）をもって行事に望み、暖かい親愛のこころをハワイの島にもたらしてくれました。

慶讃法要は百灯蠟燭の献燈、太鼓の演奏、「ホレホレ節」（移民たちが後に残してきた日本や家族のことを偲んでさとうきび畑で歌った労働歌）の合唱で始まりました。この法要は伝統的な要素と伝統でない要素とがたくみに組み合わせられたものでした。伝統的な要素とは読経、献香、合掌低頭などであり、伝統でない要素とは信徒達が積極的に法要に参加したこと（それは西洋文化では大切なことなのです）などです。こうした法要によって、参加者たちはハワイにおける曹洞宗の開拓者たちに対する深い感謝の気持ちを表し、「一世と二世」の日系人たちにこころから「ご苦勞様でした」と言うことができたのです。こうした正式の法要のあと、清興としてハワイの歌や踊りが披露され、ハワイ祭り太鼓の素晴らしい演奏がそれに続きました。

この法要の2日前に、わたしはシェラトン・ワイキキ・ホテルのロビーで松永然道師（現在永平寺副監院 前カウアイ禅宗寺開教師）にばったり会いました。すぐにお互いが誰だかわかり数分間立ち話をしました。開口一番彼がわたしに言った言葉をいまもおぼえています。師はわらいながらこう言ったのです。「すばらしいですね！かつてハワイにいたお坊さん達に次から次に顔を合わせていますよ。古い友人がたくさんここに来ています。まるで盛大な同窓会みたいじゃないですか」。そのとおり、実際とてもたくさんのお坊さんが会場に来ていました。26日の法要のとき、わたしはトイレに行くために席をはずしたのですが、トイレにたどり着くまでに、そして用を済ませて自分の席にもどるまでにとても長い時間がかかりました。というの

は移動中に、長い間会っていなかった人々や親しい友人に何度も何度も出くわしたからです。そこにたくさんいた顔見知りの人々ともっとゆっくり語りあう時間をもてたらよかったのにと残念でなりません。

僧侶の息子としてアイエアにある小さなお寺に育ったわたしは、子どもとしてそしてのちにはコナに住む僧侶として、過去40年のあいだにハワイに起こった移り変わりの実際をこの眼で見してきました。わたしが生まれる前の60年間のことについては、想像するしかありません。しかし人から聞いたり本で読んだりした話を通して、故郷から何千マイルも離れた土地（たいていは砂糖のプランテーションやこのうえなく過酷な環境）で暮らしていかなければならない人々にとって生きることがどれほど大変だったかは容易に想像することができます。故郷を離れたのは彼らが自分で選んだことだと言う人がいるかもしれませんが、たしかにその通りです。しかし、それでも生きることには大変でしたし、最も困難な状況にあっても彼らはそこで生き続けていかなければならなかったのです。宗派の別に関わらずハワイにおける僧侶たちはつねに寺院の檀信徒たちの生活に親密に寄り添いながら仕事をしてきました。彼らは檀信徒たちの痛みと苦しみを深く理解し、檀信徒たちが経験する日常生活の喜びや楽しさをともにわかち合ってきたのです。過去100年のあいだにハワイの人々の生活はすさまじい勢いで変わっていききました。しかし、僧侶の果たす役割—檀信徒達の必要とすることに応え、彼らの苦しみ、悲しみ、そして喜びの中において生きていくこと—は依然として変わっていません。

仏教の瞑想においてはあるがままの自分を認めることが第一歩だといわれています。自分の抱えている痛み、執着、業、人間としての弱さをそのまま認めることを学ぶのです。それらのことを素直に認め、自分がどこに立っているかをよくわきまえることによってはじめて、自分をまるごと受け入れ、放下し、先へと進んでいくことができるのです。ハワイにおける100年記念の式典は、そこで生きた人々、そして僧侶として活躍した人々にとっての里程碑、おそらくは100番目の里程碑になりました。それは過去をそれとして認め、われわれの前を歩いた人たちに敬意を表する機会でした。それはまた、今われわれがどこに立っているかをよく見つめてみる機会でもありました。さらには、後に残さなければならぬものを潔く手放し、未来へと雄雄しく足を踏み出していく機会ともなっていると信じたいと思います。

遠路はるばるハワイに足を運んでくださったすべての方々、過去100年にわたってハワイの曹洞宗を支えてくださったすべての人々のおかげで、ハワイ開教100周年記念慶讃行事を

成功裡に円成することができました。この無常の世界、しがみ続けることができるものなどにひとつないこの世において、われわれは道とともに歩む友人からの支えを頼みながら、次の100年に向けて歩き続けていきます。



大本山總持寺副貫首、齊藤信義老師

「おれたちはまだここにいるよ、ジョージさん!」

ジョン・R・マックレー

沼田客員教授

ハワイ大学マノア校

ジョージは自分が演壇に上がって話を始める前から、困ったことになりそうなことがすでにわかっていた。駒形宗彦師が、ハワイ大学マノア校の宗教学教授ジョージ・田辺氏のことをまもなく開始されるパネル・ディスカッションの司会として紹介する際、彼がずいぶん昔に語った衝撃的な説について言及したからだ。

…30年前、田辺教授は「ハワイの仏教は葬式をおこなう状態にある。仏教はここで死に絶えつつある」と言いました。今日、われわれは彼がそのことについてなんというか聞かなければなりません。われわれはまだ葬式をしていないし、葬式など

やりたくないのですから！…

聴衆はハワイ全島からやってきた100名をゆうに超える曹洞宗の日系人信徒であり、ほとんどが年配の人たちであった。彼らは駒形師の触れた昔の出来事を思い出して笑い声をあげた。ジョージが司会として演壇に上がり、駒形師の紹介に対してユーモアと率直な告白を持って応えた。

…ふむ、それはおそらく長いお通夜のようなものかもしれませんね。明らかに私の予言はずれました。まだお葬式は始まっていません。たぶん本葬は将来に持ち越されたのでしょうか。会場を見渡しここにいらっしゃる皆さん—お若い皆さん—を拝見するに、大災難に遭遇するのはまだしばらく先のことのような気がします。…



100周年のパネルディスカッション

以上のやり取りは最近開催された曹洞宗ハワイ開教100周年記念慶讃行事におけるパネル・ディスカッション（2003年10月23日）の席でなされたものである。このディスカッションのテーマは「新しい時代・希望を込めて・新しいチャレンジ・まごころと調和をもって・仏教の今日と明日」であった（なんとまあなんでもかんでもほおりこんだようなギクシャクしたタイトルであることか！）。そこでは広範囲のトピックが論議されたが、みんなの心にあった共通の問題はここ50年余りのあいだに起こった人口統計上の情け容赦ない変化に抗して、ハワイの曹洞宗が生き延びるためには一体なにをなすべきかということであった。誰もがそういう問題があることには気がついていて、メンバーがよそに引越したり、他の教会に移ったり、年をとったり、亡くなったりするにつれて信徒の規模が年々小さくなっているのだ。日本からの移民の最初期から時がたつにつれて日系人コミュニティの結束は着実に弱まってきている。

細かい点についてはハワイ独特のものがあるけれども、だい

たいにおいてはハワイという土地を越えた、より大きなアメリカ文化の「^{るつぼ}垣塙力」が作用しているのだ。ジョージ・田辺はすでに30年前の時点でそういうプロセスが確実に進行しつつあることを見出したのだった。最近彼から聞いたことだが、1977年にコロンビア大学で博士号をとった後、故郷のハワイに戻ってきた時には、彼はハワイにおける仏教がどういう状態にあるのかあまりわかっていなかったそうだ。しかし、それからまもなく若者特有の性急な熱心さで、彼は自分の言うことを聞いてくれそうな人々に向けて、ハワイの仏教がもうすぐ終焉するだろうという考えを話し始めた。だから曹洞禅の在家信者達からなる聴衆に向けてそのテーマが話されたときには、実は誰もがもうすでにその話を耳にしたことがあったのだ。それがハワイにおける浄土宗の集まりであろうと天台宗の集まりであろうと真言宗の集まりであろうと事態は全く同じになっただろう。だから、私はジョージに「君はどこへいっても同じように人の感情を害してしまう人だ」と言ったのだ。彼は自分が「若い腕白者（young turk）」だったからこういう過激な発言をしたのだと言うが、今や彼はただの「年取った愚か者（old turkey）」だ。

それから数週間後、ジョージとわたしは浄土真宗の本願寺別院で開かれたワークショップに参加した。私は今学期、ハワイ大学へ沼田客員教授として来ており、ジョージは私の世話人でありもっとも近い同僚である。形式ばらないうちとけた状況で、彼と考えをやりとりするのは楽しいことだった。彼は話のなかで、曹洞宗ハワイ開教100周年記念慶讃行事で彼が述べたこと背景について触れ、「ハワイの仏教の終焉」について初めて語った時からあとの事態の展開を踏まえて、自説の当否を評価してみせた。初期の著述のひとつをふりかえりながら、あの有名な予言をおこなったのは、実は30年前ではなく25年前のことだったと話した。そしてその予言の内容は「25年後に仏教は滅びる」ではなく「2025年までに仏教はほとんど死んでも同然の状態になるだろう」というものだったのだ。したがって、ある観点からすれば、当時彼が実際に言ったことは人々の記憶に残っているものよりもはるかに温和なものだったといえる。ジョージの記憶によれば、そのころ、何人かの日本人の学者兼僧侶たちも当時の仏教について非常に批判的な表現を用いて語っていたし、根本的な変革が必要であることを率直に説いていた。たとえば、ハワイの日蓮宗総監であった村野宣忠師は当時の仏教が墮落していると語っていたし、1967年から1972年までハワイ本派本願寺の総監であった今村寛猛師も論文の中で仏教のことを矢に射られて血を流しているのにそれに気がついていない人間にたとえている。だからジョージもハワイの仏教について「もし2025年までに死んでいないようなら、われわれの手でそれを殺すべきだ！」と言いたくなったのだった。いまの彼は当時自分が言ったことが、あまりにショ

ツキングなことだったのが理解できるので自分でも笑ってしまうくらいだ。

さて、話をふたたび例のパネル・ディスカッションに戻そう。その席でジョージは司会役を大変見事に果たした。それぞれのスピーカーを紹介する際にはしばしば自分が彼らと出会ったときの面白くかつ感動的な逸話などを交えていたし、それぞれのスピーチのあとには短いコメントを加えて聴衆がそれぞれの話し手の立場や洞察を理解できるよう手助けをした。長年にわたってハワイの曹洞宗の信徒であり寺のオルガン奏者でもあるピートゥレス・吉本さんは、信徒としていかに曹洞禅を日常生活のなかに生かしていくかについて数多くの実際的な示唆を行った。彼女がストレスの多い状況に入る前や、そういう状況のただなかで自分を統一するために、必ずしも坐蒲の上で坐る坐禅ではないやりかたで、いつでもどこでもさっと坐禅をする時間をもつという話にわたしは大変感心した。

ホノルルにある浄土真宗モイリリ本願寺派布教師であるエリック・タツオ・松本師は、仏教の概念や理想を、日ごろの言葉のなかに表現することができるしそうしなければならないことについて自分の考えを述べた。コナの大福寺の副布教師であるマリベス・慈光・大島一中出さんはハワイ島にある僧伽のなかに民族的には日本人ではない若者が加わってくれることを強く願っていること、そうした伝統的ではない信徒たちが坐禅の修行を受け入れていることなどについて語った。彼女や他の人が報告したことの内では、そのことが人口統計の推移が示す脅威から生き残らせるような仕方ではハワイの曹洞宗を変えていく、創意に富んだ最もうまくいくであろう現在進行中の努力であるように思われた。

最後に、ハワイ曹洞宗僧侶養成課程の最終段階にいる（そして今学期はハワイ大学におけるわたしのクラスの学生でもある）駒形宗二師が曹洞宗僧侶の息子として成長すること、自分が将来僧侶としての人生を生きる準備をすることについて語った。欧米の禅修行者たちが、宗教的修行についての彼の考え方を聞いたならばその違いにおそらくびっくりするだろう。その席での彼のコメントやその後のインタビューで、彼が父親且つ師匠、総監、檀家、そして自分の妻（順序としては最後であってもウエイトにおいては決して最小ではない）からの期待に応えながら自分の宗教的なアイデンティティをどのように見出そうとしているか、そのやり方に私は大変感心したのである。

聴衆からの質問やコメントは洞察に溢れるものが多く、仏教についてもっと学びたいという深い関心と、活字になった資料が足りないこと、そのことについて僧侶達が彼らをあまり進ん

で援助しようとしていないことへの欲求不満が表明されていた。ある女性はどのようにして仏教を日本文化から切り離すか、その上で仏教を修行し広めていくことに精力を集中する必要があると雄弁に指摘していた。ディスカッションに入って最初に聴衆から発せられた質問はジョージに向けられたものだった。丁寧な声ではあったが明らかに挑むような調子で、年配の紳士が、「ジョージさんはかつて自分がおこなった予言のことをいまどう考えているか是非知りたい」と質問したのだ。

ジョージは山本さん、と名前を言って質問者に感謝し、雄弁ではあるが幾分専門的な説明をもってそれに応えた。山本さんがジョージの率直な告白ではなくそういう説明を本当に望んでいたかどうか、私にはわからない。実際のところ、彼が言いたかったのは「おれたちはまだここにいるよ、ジョージさん！」ということではなかったろうか？



注釈：文中用いられております「開教」の用語は、宗制上現在では、「国際布教」に改正されております。国際布教においてこれまで使用されてきた用語としてここでは使用していただきます。（曹洞宗国際センター）

打坐をめぐる断想集 私の『坐禅参究帖』（十二）

藤田一照

《断想 22》 兀坐のなかの動き（二） —体軸のゆらぎ—

坐禅の坐る姿勢は立つ姿勢に比べればはるかに安定度が高い。立つ姿勢においては、地面に接する両足の裏とそれらによって囲まれている範囲が体の重さを受けとめる基底面になっている。立ったときの両足の広さは全体表面積の約1%くらいというからきわめて狭い。これに対して、坐禅の姿勢では、結跏趺坐によって両膝と尻の三点が形づくる三角形が基底面になるから、それよりもずっと広い。立つ姿勢を円錐が頂点で逆さに立っているようなものだとするなら、坐禅は三角錐がでんと坐っているようなものといえよう。坐ることによって重心の位置がより低くなることも安定度を増す要因になっている。だから、ヒトが人たる基盤である「体の主軸＝体軸の直立」を最も安定的に実現する姿勢が結跏趺坐の姿勢なのである。（ここでも「兀」という字は坐禅の安定性を表すのにふさわしい形をしていることに気づく。）

しかし、兀坐の安定性は物体のもつ静的な安定性とは質を異にしている。鉛直方向に沿って、重力によって常時下に引っ張られている場において生身の人間が坐るのであるから、いかに安定度の高い姿勢とはいえ、体軸を重力方向に沿って真っ直ぐに保ち全身のバランスを維持し続けるためには、刻々にくずれを補正し調整するような動きが不可欠のものとなる。だから、それは動的な安定性なのだ。その具体的現れとして、坐禅中における体軸の動きをとりあげてみよう。

坐禅を開始するとき（終わる時にも行うが）には「左右揺振（さゆうようしん）」を行う。これは、坐甫の上にある尻の位置を動かさないようにして、頭－背骨を真っ直ぐに保ち、腰から上を一本の棒のようにゆっくりと左右に倒す（前後運動をいれても可）運動のことで、はじめ大きく深く倒す動きから段々小さく浅く倒す動きにしていき、七、八度動かして静止する。「欠気一息（かんきいっそく）」（深呼吸）と並んで『普勧坐禅儀』にあげられている坐禅の準備運動法である。この運動は、筋肉・関節の凝りをほぐし、姿勢の無理や窮屈なところをのびのびさせる目的で行うのだが、私はそれにもう一つ付け加えたい目的がある。

それは、大きな揺振から小さな揺振へと移行していく過程で、重力の方向に最も調和したベストな体軸の位置（「左へそばだ

ち、右へかたぶき、前にくぐまり、後ろへ仰ぐ」ことのない、もっともバランスのとれた体軸の位置）を、体感によって発見するということだ。前後左右の揺振によって体軸をいろいろな角度に傾けながらさぐりをいれて、だんだんその最適位置に接近し、最終的にそこにピタッと自分の体軸を静止させるのだ。

（だからこの運動は正身端坐への導入として重要な意義をもつのであり、あだおろそかにおこなうべきではない。）

「兀兀坐定」とは、体軸をその位置にしっかりと据えて、そこからはずさないようにして坐りなさいということだ。しかし、実際にはこの揺振が完全に静止することはない。意図的な粗大な揺振運動はもはや行っていないにもかかわらず、微細な揺振運動が依然として無意識のうちに続いているのだ。それは、まさに「体軸のゆらぎ」だ。

「左右揺振」によってひとまず体軸を適当な位置に落ち着けることができたとしてもその後の坐禅中の身心両面における大小さまざまな出来事からインパクトを受けて、容易に動揺し変位する。体軸の保持ということは、それほど微妙なことなのだ。厳密に言えば、体軸は、所定の位置からずれることを常に繰り返しているのだ。だから、正身端坐を続けるためには、体軸のずれ→ずれの検出→ずれの補正という調整のための揺振運動がいつも起こっていなければならないのだ。体軸が正しい位置にある時の感じがはっきりしていて、そこからのずれに対する感覚が鋭敏であれば、そのずれの検出が迅速であり、姿勢の補正が速やかにかつ適切に行われるので、体軸のゆらぎは外目ではとらえられないほど微小な範囲にとどまっている。逆に、ウトウトしながら坐禅をしている場合（昏沈 こんちん）には、この感覚が鈍っているのだ、大きくずれてから修正することになり、俗にいう「舟をこいでいる」ような大きな揺れになってしまうのだ。また思いを追いながら坐っているとき（散乱）にも、体軸の位置に関する感覚が当然鈍くなるのでずれの検出が遅れ、姿勢は大きく傾く結果となる。

正身端坐における微細な揺振運動はほとんど無意識的な調整活動である。坐禅をしている当人の意識においては「体軸が重力と調和したい位置にあり、バランスのとれた楽な感じ」を味わいながら、そこにとどまりさらにそれがより深まるようねらっているだけで、あとの具体的な細かい調整は体に「お任せ」しているのだ。この「感じ」がより鮮明になり、それまでの体軸の位置よりさらに適切な位置に動いていくこともあるし、時にはこの「感じ」が曖昧になってその位置を見失ってしまうこともある。この「感じ」自体が時間とともにゆらいでいるのだ。

スタシオロジー（身体静止学）という研究分野を開拓され、

「足の裏博士」と異名をとる平沢彌一郎という方がおられる。平沢先生は直立姿勢における重心のゆれを検出・記録する装置を開発され、非常に興味深い数々の知見を発表されている。

(『足の裏は語る』筑摩書房、『新しい人体論』放送大学教育振興会など) いずれも私が坐禅について考える上で、貴重な参考資料になっている。私はこの装置を使って、坐禅中の重心の揺れについていろいろ調べてもらえないだろうかと思うている。「不動中の動」の実態、重心のゆれ具合と坐相の正確度の関係、精神状態と重心のゆれとの関係など、坐禅中の脳波に関する研究などよりも、もっと坐相そのものに密着した諸側面に光があてられるのではないかと期待しているからだ。



穀蔵隆雪

墨絵画家

宮城県に生まれた隆雪さんが育ったのはたいへん風光明媚な土地で、そこで目にした美しい自然の鮮やかな印象が彼女の胸の内にずっと残り、それが彼女の芸術的創作に多大の影響を与えている。

隆雪さんは墨絵師範、河合墨雪の弟子であり、鳥、花、動物、人物を描くことを得意としている。日本の伝統的な白黒の墨絵に色をつけるというやりかたで作品をつくっている。

2000年にハワイにやって来るまで、28年にわたって南カリフォルニアに住み、そこで墨絵を教授してきた。墨絵の教授25周年を記念して、1997年にはリトル東京にある日系アメリカ人文化コミュニティセンターで個展を開いた。

また14年にわたってラグナ・ビーチで開かれる芸術祭への作品出展者であり、ロサンゼルスで毎年開催される二世ウィークや日本博覧会にも作品を出展してきた。さらにヒルトンホテルチェーン、カリフォルニア信託銀行からの委託作品をてがけたこともある。彼女は南カリフォルニアで最も優れた芸術家の一人とされている。

隆雪さんはハワイ・ワイパフの曹洞宗寺院 太陽寺において墨絵と書道の教室を始め、自分の墨絵作品を用いたカレンダーを作成している。

ワイパフ 太陽寺 94-413 Waipahu St. Waipahu, HI 96797
電話 (808) 671-3103



この号のすべての墨絵：穀蔵隆雪

ニュース

◎2003年10月15日～19日 ロサンゼルスにおいて、北アメリカ開教ならびに兩大本山北米別院禪宗寺創立80周年記念行事が授戒会とともに開催された。最初の2日間の行事のうちには国際布教師と伝道教師のための授戒に関する研修会が含まれていた。120名を超える人々が戒師である板橋興宗禪師から戒を授かった。日本から来た56名の僧侶とアメリカ各地から来た36名の僧侶がこの行事を手伝うために参集した。

◎2003年10月24日～26日 曹洞宗ハワイ国際布教総監部はハワイ開教100周年記念の慶讃行事を開催した。(詳しくは田宮隆児師による記事を参照下さい)

◎2003年11月7日～12月9日 伝道教師研修所が愛媛県新居浜市の瑞応寺専門僧堂で開催された。ヨーロッパから3名、北アメリカから3名の参加者があった。

国際布教関連行事

ヨーロッパ曹洞禅会議

場所：ヨーロッパ国際布教総監部

Via San Martino 11/C

20122 Milan, Italy

日時：1月17・18日

北アメリカ曹洞禅会議

場所：桑港寺

1691 Laguna Street

San Francisco, CA 94115

日時：2月28・29日

曹洞宗国際センター国際交流接心 & 法話

原田雪溪ヨーロッパ国際布教総監指導の接心が2回開催される。これらの接心はソノマ・マウンテン・禅センターと禅センター・オブ・ロサンゼルスの後援のもとにおこなわれる。

場 所：Sonoma Mountain Zen Center

6367 Sonoma Mountain Road

Santa Rosa, CA 95404

日 時：2004年5月19-23日

連絡先：1-707-575-8105

場 所：Zen Center of Los Angeles

923 S. Normandie Avenue

Los Angeles, CA 90006

日 時：2004年5月27-31日

連絡先：1-213-387-2351

サンフランシスコ禅センターの後援による原田総監の法話

場 所：San Francisco Zen Center

300 Page Street

San Francisco, CA 94102

日 時：2004年5月25日 午後7時半

連絡先：1-415-863-3136